

羽仁もと子の家庭教育思想の誕生と展開に関する一考察

— 『家庭之友』と『家庭女学講義』の編集意図を中心に—

*徐 真 真

はじめに

1. 先行研究の検討と本稿の課題
 - (1) 羽仁もと子の教育活動・思想に関する先行研究
 - (2) 羽仁もと子の家庭教育論に関する先行研究
2. 『家庭之友』の創刊と羽仁もと子の家庭教育思想の誕生
 - (1) 『家庭之友』の特徴
 - (2) 母親による教育の重要性
 - (3) 家庭教育への関心
3. 『家庭女学講義』の発行と羽仁もと子の家庭教育思想の展開
 - (1) 『家庭之友』とは異なる『家庭女学講義』の特徴
 - (2) 体系的な育児・家庭教育論
 - (3) 家庭教育の原動力となる精神性

おわりに

はじめに

本稿の目的は、明治末期に羽仁もと子(以下、羽仁)によって創刊された『家庭之友』¹と『家庭女学講義』の編集意図と内容的特色を考察することによって、羽仁の家庭教育思想の誕生と展開を明らかにすることである。

小山静子によれば、日本において「家庭」という言葉は1880年代後半から、従来の家族のあり方とは異なる新しい家族を示すものとして頻繁に使われ始めたと言われている²。そこでの家庭の特徴は、第1に子どもの教育に積極的な関心を示す家族であり、子どもは大人とは異なる特別な存在として位置づけられたことと、第2に家庭には「男は仕事、女は家事・育児」といった近代的な性別役割分業が想定されたことであると指摘される。つまり、この新しい「家庭」という用語には子どもの教育が重視されることに加え、その教育を母親が担うという意味内容が含まれている。

また、近代的な学校教育制度が導入されたことも、

「家庭」の新しい意味内容を加速的に普及させることとなった。特に女子教育に関しては、1899年の「高等女学校令」において、その特質は「良妻賢母主義」教育にあると明記され、ここにおいて母親が子どもを教育するという役割は、社会における制度として定着したと言えよう³。

こうした動向の背景には、1890年代後半から、婦人雑誌が次々と創刊されたことにより、特に中流階級において家庭教育に関する議論が盛んになってきたことが挙げられる。これらの雑誌においては、さまざまな家庭論がただ理論的に論じられるのではなく、具体的な家庭の姿、特に家事や育児などに関するより具体的な生活記事が掲載されていた。例えば、本稿で取り上げる羽仁⁴によって編集・執筆された『家庭之友』(1903.4~1908.12⁵)と『家庭女学講義』(1906.4~1907.12)はその典型である。彼女は誌上で、理想の家庭像を追求しながら、独自の家庭教育論を展開してきた。また、羽仁はジャーナリストであり、さらに母親でもあり妻でもあったが、彼女が提唱した家庭教育思想は、当時の女性たちから大きな反響を得たのである。しかし後述するように、羽仁の家庭教育思想につ

* 名古屋大学大学院学生

いて十分に研究されているとは言い難い。特にその思想の誕生と展開に関する考察はほとんどなされていなかったと言える。

そこで本稿では、第1節で羽仁の教育活動・思想および家庭教育思想に関する先行研究を検討する。第2節では、『家庭之友』の創刊と誌上の記事に基づいて、羽仁の家庭教育思想がどのように誕生したかを明らかにする。第3節では、『家庭女学講義』の創刊と彼女がそこでいかに家庭教育思想を展開していたのかを考察する。こうした作業を通して、羽仁の家庭教育思想は、どのように体系化されたかを明らかにするうえで、その原動力が何であるのかを提示したい。

1. 先行研究の検討と本稿の課題

(1) 羽仁もと子の教育活動・思想に関する先行研究

羽仁の教育家としての活動とその思想に関しては、大きく分けて2つの方面から研究が蓄積されている。

第1に、1921年に羽仁夫妻が創立した自由学園に焦点を当てた研究である⁶。自由学園は大正時代の新教育運動の潮流のなかで創設された高等女学校令によらない各種学校である。学園設立当初の目標は、「家庭的友情的気分の中」に、「高等女学校と同種類同程度の学科目」を設ける一方で、「生徒各自の実生活の経営を指導して、生徒は(略)その実生活のよき発達と進歩を遂げて行くやうにしたい」⁷という。この目標を達成するために生徒を6人ずつの家族に編成し協同生活を行う「家族組織」が作られた。斎藤道子が、この「家族組織」は「彼女(羽仁—引用者注)の家庭論の実践の場」⁸であるとしたように、自由学園での教育活動は家庭のあり方と密接な関係にあると言える。しかし、斎藤は自由学園が各種学校であることから、「そのために種々の不便を蒙りながらも自己の信念に基づく自由な教育を貫く反官の学校として、また社会に働きかける女性の育成という反封建的女子教育として、さらに、徹底した生活教育という点において、まさに大正デモクラシー思想の実践であった」⁹と評しているように、自由学園に関する研究では、主に羽仁は大正期における自由教育の実践者として解釈されてきたと言える。

第2に、彼女の教育活動を、単なる学校教育ではなく、家庭と学校を中心とした「社会改良」としてとらえる研究である¹⁰。ここでいう「改良」とは、家庭の改良を出発点に置き、最終的には平民主義家庭論・民主主義的家庭論の構築を目的としたものと言われる¹¹。羽仁の教育活動は生涯にわたっており、1903年に生活

啓蒙雑誌『家庭之友』の創刊を皮切りに、『婦人友』の発行(1908年)、自由学園の創立(1921年)、そして雑誌の読者からなる「友の会」の結成(1930年)に至る。その過程で一貫しているのは、生活の「合理化」と家族構成員の「人格の自由と独立」という理念である。こうした理念は、最終的には羽仁が推進した生活合理化運動「全国友の会」を通じて組織的に展開されたことから、これを「婦人たちの啓蒙運動」として解釈する主張も見られる¹²。

このように従来の研究では、羽仁を教育家と解釈するか生活改良者と捉えるかという点で視点が異なっている。しかしながら、両者ともに彼女の活動および思想の出発点を家庭にあるとみなす点では一致していると言える。その意味では、彼女の教育および生活をめぐる思想とは、「家庭」をめぐる言説そのものであると考えられる。ゆえに、その言説の構成を紐解いていかなければならないであろう。

(2) 羽仁もと子の家庭教育論に関する先行研究

まず、大正期における羽仁の家庭教育論を研究した小林輝行¹³が挙げられる。小林は、近代日本における家庭教育論と家庭教育の実態という両面に着目し、時代ごとにその特質を明らかにした。具体的には、小林は家庭教育論の特徴を、伝統的儒教主義、欧米の個人主義思想に立脚した個性尊重主義、国家主義、社会主義という四つのカテゴリーに分類し、家庭教育の実態面では、士族家庭、農民家庭、知識人家庭をとりあげ、それらの階層差に着目した。こうした各特徴を踏まえて時代的推移を具体的に見たところ、小林はまず明治前期の段階に、個人の解放を志向する断片的・非体系的な「個性尊重主義家庭教育論」が、高度な知的生活、経済生活を営む家庭に限って行われたと指摘する。次に明治後期になると、名実ともに個人の解放を志向した、本格的・体系的な「方法的次元における個性尊重主義家庭教育論」が登場し、都市を中心として官吏、医者、教師などといった知識人家庭に徐々に広がっていったという。さらに大正期に入り、「子供本位」の家庭教育論が現れたとする。小林はそれを教育方法としての「子供本位」、人格尊重としての「子供本位」、権利主体としての「子供本位」、国家主義的「子供本位」¹⁴の四つに分類整理している。

小林は、権利主体としての「子供本位」にあたる家庭教育論の代表例として羽仁のキリスト教的家庭生活主義を挙げ、安部磯雄の社会主義的な立憲的、民本的家庭教育論とともに、これらを子どもの権利や親の義務を説いた大正期の家庭教育論の中で、最も体系的な

家庭教育論であったと評価している¹⁵。しかし、なぜ羽仁の家庭教育論が大正期に際立った体系性を持ち得ていたのかについては、小林は論じていない。大正時代に先立ちすでに1903（明治36）年の時点で、彼女はジャーナリストとして、雑誌の編集・執筆といった活動を開始し始めていた。そういったメディア展開と家庭や家庭教育に関する論考の関係性はいかなるものであったか。この時期は、彼女の家庭教育思想の誕生と展開にあたっており、彼女の家庭教育論の特徴をつかむには、看過することのできない時期なのである。

さらに、林美帆¹⁶は近代家族論の観点から、羽仁の家庭教育論を考察している。林は、国家という枠組みのなかで家庭をとらえるという近代家族論に共通する傾向に疑問を投げかけたうえで、羽仁の家庭教育思想に関し、それを国家とは無関係な枠組みから近代の家庭を捉えたものとして解釈した。近代家族においては、学校教育に家庭教育が隷従しているのに対し、羽仁の枠組みにおいては、家庭教育に独自性を与えることを教育論の柱としている、とするのである。林によれば、羽仁の枠組みの特徴は、家庭教育は「己の限界」を自覚するためのものである。そして、その限界の自覚が他者と関係性を築く基礎となり、その関係性が家庭の情愛となるのだという。そこでは、国家という枠組みに絡むことなく、家族は親密圏における自己と他者の関係性に還元されており、その枠組みは現代に通じる家族論に近いものと捉えられている点で興味深いと言える。しかしその反面、林の枠組みは大正期に発行された『婦人之友』の記事に依拠して組み立てられており、先述した明治末期における初期のメディア展開を始めたころの羽仁の家庭教育思想との関連については分析の対象外となっている。そのため、林の分析は羽仁の思想を包括的に解釈したものと言うことは困難であると考えられる。

ほかにも羽仁の家庭教育論に関する論考がいくつかあるが、いずれもその思想の誕生期にあたる明治末期を対象として考察したものではない¹⁷。このように、羽仁の思想が「家族」を基礎とする教育論であり、さらにその体系性が大正時代に出来上がっているのだとすれば、明治末期における彼女の活動にこそ、羽仁の独自の「家族」思想の生成過程が見出せるはずである。本稿では、1903年から1908（明治41）年頃までの羽仁の家庭教育に関する言説を対象とし、これまで十分に考察の対象とされてこなかった『家庭之友』と『家庭女学講義』の内容的特色とそれらの編集意図から、彼女の初期の家庭教育思想がどのような特徴を持っているかを明らかにしたい。

2. 『家庭之友』の創刊と羽仁もと子の家庭教育思想の誕生

（1）『家庭之友』の特徴

『家庭之友』は1903年4月に内外出版協会によって発行された家庭雑誌であり、その編集を担ったのが羽仁夫妻であった¹⁸。羽仁もと子は主として記事の執筆と編集を行い、夫の羽仁吉一が編集の手伝いをするかたちで関わった¹⁹。

創刊号の巻頭言には、「既に家を成せる人々、これより家を成さんとする人々、其他家庭に関係あるすべての男女に向かつて切に本誌の一読をもとめる。本誌はこれらの人々のために、親切なる相談相手となり、専ら家庭の実際問題を研究したい。まことに微力であるが、家庭改良の機運を導いて、其実効を収むる上に、多少の貢献をなすことを得ば本懐である」²⁰と書いてある。ここから同誌の対象読者と創刊の目的のうかがえる。まず読者としては、すでに結婚して家庭を持っている人と、まだ結婚していないが今後結婚するつもりがある人々を含め、男女問わず家庭に関係あるすべての人を対象としている。雑誌の目的は、家庭のなかにある様々な実際問題を研究することによって、「家庭改良」を実現することである。さらに「如何にして円満なる家庭をつくるべきか、如何にして家庭の和樂をすすむべきか、如何にして不健全なる家庭を改良すべきか」²¹というような議論が趣旨とされる。要するに、「円満」「和樂」のような家庭像をめざし、「不健全」な家庭を改良することが『家庭之友』の目的であると言える。

雑誌の内容は、家政や育児などの家庭の実務から、婦人の修養までも含まれて、家庭に関わるほとんどすべてのことをテーマとしている。まず、家政に関しては主に如何に家事をより効率よくするかに関する議論と、貯金や予算をたてるという家計を健全にすることと時間をより有効に利用することが中心となっている。ほかに、洋服の普及や栄養を考える家庭料理などの紹介も多数見られる。次に、育児に関しては西洋の育児法の紹介、子どもの教育に関する記事を中心とし、小児の遊戯や子ども向きのお伽噺も連載している。さらに、婦人の修養に関する記事は婦人会、母の会などの組織への入会の呼びかけ、読書の案内、交際論などといった婦人自身の修養を高めようとする内容が多い。例えば、明治母の会を「育児、家政の実際問題並に料理の研究、洗濯裁縫にかかわる事など、最も真面目に实际的に研究している」²²と紹介し、読者の入会や同会が主催する講習会への参加などを勧めている。

『家庭之友』は読者との間の交流を重視している。毎号に「育児問答」、「家政問答」²³の欄を設け、読者からの育児・家政に関する質問及びそれに対する学者、医師、教育家、宗教家などといった専門家の解答を掲載する。また読者の家庭における料理、子どもの言行、家庭日記などに関する投書も募集している。

ところで、『家庭之友』の発行に関し、羽仁夫妻の長女の説子が創刊号の発行の前日に誕生したことは、少なからずその編集に影響を与えていると思われる。吉一は誌上で、「私の小児の教育と共に、本誌の編輯は、私の家庭の事業として、心ながく其の成長を楽しみたい考である」²⁴と書いており、また子どもの誕生とともに、羽仁は自分の家庭を実験台にして、育児や家庭教育を模索してきた²⁵。彼女は専門家を訪問して記事を書くと同時に、自分の育児や家庭教育の経験なども雑誌に載せている。こうしたことから、羽仁の雑誌メディアの編集作業は、家庭をめぐる理論と実践の相互作用から成り立っていると言えよう。さらに、そうした相互作用から知見を得た読者と、雑誌への投書を通してさらなる対話が行われ、情報が広く共有されるのである。すなわち彼女の思想は、一方的に形成されたものというよりは、実践と対話を蓄積していくことで形成されていったと言えよう。

(2) 母親による教育の重要性

では具体的に羽仁はどのような家庭教育を主張したのか。『家庭之友』において、子どもの教育との関連で彼女が最初に関心を示したのは、幼稚園に関する議論である。羽仁は5人の専門家を取材し「小児を幼稚園に託すの可否」(第1巻2号)という記事を書いている。その内容を見てみると、ドイツ人であるハンス・ハアスは、フレーベルの幼稚園構想に基づきながら、一人っ子で友達を求めに幼稚園に来るといった特別な場合を除けば、幼稚園は父母の保護の下に置かれぬ幼児のために設置されるものだと主張している。門野幾之進の夫人の門野駿子と華族女学校幼稚園の主任である野口幽香子は、幼稚園は「下層貧民の児女」や「貧しき人」のために設けられるものだという点で共通している。松波仁一郎の夫人の松波珠子は、子どもはなるべく窮屈などを避け、自由に育てる方が良いが、幼稚園は不自由であると主張している。医学博士の弘田長は、医学上から見ると幼稚園は「危険千万」なので、子どもを入園させることに反対している²⁶。

このように、当時の議論では幼稚園に対して消極的な態度をとっていることがうかがえる。1870年代に幼稚園が日本に導入されたことともに、その必要性と有

効性をめぐる論争は、幼稚園関係者・教育学者の間で行われてきた²⁷。同記事によると、幼稚園に行く必要があるのは、家庭のなかで教育を受けることができない子どもたちのみである。つまり、子どもの教育は幼稚園ではなく、家庭のなかで行われるべきだということが読み取れる。これは当時の幼稚園批判と幼稚園無用論と軌を一にする。しかし、これはあくまでも羽仁が他人を取材して書いたものである。彼女自身の幼稚園に対する態度はどのようなのであろうか。彼女は「家庭幼稚園の話」(第1巻4号)という記事で、明治母の会の会頭であるコーツ夫人が組織した家庭的幼稚園を紹介した。同記事によると、6人の子どもがいるコーツ夫人と友達のヘーゲル夫人などの数人と話し合い、自分たちの子どものために、ヘーゲル夫人の自宅で家庭的幼稚園を設けた。その様子は羽仁によって以下のように記されている²⁸。

ヘーゲル夫人は階下の部屋で大きい子供に読書を教えて居られたのです。コーツ夫人の扱って居らるゝ組は二階の部屋で、左の壁には黒板が掛けられてあり、其下よきほどの所にオルガンを据え、黒板に向つて右側には、男女七人の子供が机を中にそれへ小さな椅子に向ひ合ふて腰かけて居る(略)。この一組と反対の側には、モ一少し小さい八人の子供が、若い日本婦人(多分夫人の助手であります)の世話の下に、赤や緑や黄や紫や種々な玉を糸に通して居りました。(略)コーツ夫人の組みの中で、三人の男の子が少し大きいので、外の四人の子供が貼り物をする間に、一人々々夫人の側にひざまづき、夫人の膝に凭れながら、一冊の書物によつて綴りと発音を習つて居るのです。一人が教はる間に、二人の子供は貼り物をして居る女の子に、それは親切に教へてやつたり、直してやつたりするのであります

このように、家庭幼稚園でヘーゲル夫人とコーツ夫人は、幼稚園の保母として子どもたちを教える様子が分かる。合計20人ほどの子どもを年齢によって3組に分け、年が上の子どもに読書を、少し小さな子どもに識字を、一番小さな子どもに遊びを教えていたことが見られる。さらに、教える側と教えられる側の間及び子ども同士の間での親しい関係性が読み取れる。また、羽仁は普通の幼稚園を参観した経験を記載し、普通の幼稚園での、保母が無愛想で子どもに対して感情を持たない教え方を批判している²⁹。続いて羽仁は以下のように呼びかけている³⁰。

私は四五人の友達が申し合せて、互に子供の世話を仕合ふといふこの方法を、何うぞ多くの母親達におすゝめしたいと思ひます。一週間に一度か二週間に三度も、半日宛の暇を費しますと、自分の子供は、毎日半日づゝは安全に世話してもらはれ、また適当な教育をも施してもらふとかが出来るのであります。然もその世話する人は、見も知らぬ幼稚園の先生でもなく、無智な子守でもなく、自身と同じく現に幼児を持つて居る、自身の親しい友達ですから、子供の為にも母親の為にもこれ程幸ひなことはなからうと思ひます

こうして、羽仁は母親たちに以上のような家庭的幼稚園をつくるように呼びかけている。子どもを教育するのは、幼稚園の先生や子守よりは母親のほうが適切だと考えているからである。そして彼女は地方の家屋が広いため、子供を集める場所が作りやすいことと、子どもを連れて郊外散歩を楽しむことが容易にできるという理由で、都会の母親より、むしろ地方の母親の間で行われやすいと主張している。羽仁は都会の家庭だけではなく、地方の家庭にも目を配っていることが読み取れる。

羽仁はこのような家庭的幼稚園における教育内容について、最初は「単に互に守をしあふといふ程の事でもよい」が、それから母親たちがどんどん進歩し、「天然の愛情に加へて、何時の間にか立派な幼稚園の保姆になるゝ」³¹と考へている。さらに母親たちが幼児の教育ができるようになったら、次には尋常小学校程度の教育を考へるように勧めてゐる。また、羽仁はこのような家庭的幼稚園を通して母親たちに子どもを教育する役割を期待する一方で、母親たちにとっては外出の機会を提供することと、他の母親との交際ができる点で、母親自身の幸福と精神的修養が高められるという点も提示している。

以上のように、羽仁は幼稚園に対する批判的な論説を取り上げたが、彼女自身は普通の幼稚園と家庭的幼稚園の実際の現場の両方を考へると、必ずしも幼稚園を完全に批判する立場ではないことが分かる。彼女は子どもが母親の愛情を感じる家庭的幼稚園を提唱し、そこで子どもを教育する役割は専ら母親たちに期待する。また、母親自身の幸福と修養のためになるという点で、子どもの教育のみならず母親をも含めた家庭教育の考へ方が示されている。さらに彼女はいわゆる専門家の理論をそのまま受け継ぐのではなく、自分の体験とも含めて自分の意見を示すようにしている。ここ

で、羽仁のなかに家庭教育に関する理論と実践の相互作用が見られるであろう。

（3）家庭教育への関心

では家庭において母親はどのような教育を行うべきなのか。羽仁が最初に記事のタイトルとして「家庭教育」を掲げたのが、チャペル夫人を取材して書いた「我家の家庭教育」（第3巻1号）である。チャペル夫人は3人娘の母親であり、西洋人の子どもの学校の先生と同盟母の会³²の副会長を務めている人物である。同記事ではチャペル夫人自身の経験をもとに、羽仁は家庭教育について子どもの勉強の指導、家事の練習、適切な読み物の選択、宗教的教育を行うなどといった点を挙げている。特にチャペル夫人は「父と云ひ母といふ重大な責任を尽すには、神様の助けを祈らなければ、どうも充分に安心」³³することが出来ないと考えているように、宗教的教育という精神的なものに基づいて親の責任を説いたと言える。羽仁はこの点について否定していない。

続いて2ヶ月後に同じ「我家の家庭教育」（第3巻3号）というタイトルで、再びチャペル夫人、向軍治、松浦政泰の3人の話を掲載している。具体的に見ていくと、羽仁はまずチャペル夫人が青山母の会の例会で、「徳育に就て」と題して話したことをまとめた。そこで子どもが生まれてから、成長していく各段階で注意すべきことが挙げられている。まず子どもが生まれた時から規律を与えること。次に子どもが3歳になると、「我欲」に支配されないように、「良心」の働きを培うこと。その方法としては子どもに感化を与えるようなお伽噺を聞かせることが書かれている。続いて子どもには「著しく智慧を現す段階」になると、良いお伽噺、絵画、書籍、自然などを通して、物の道理を教えてあげること。最後に子どもは父母の命令に従順するようにつけ、そして両親は常に自分の品性を錬磨しなければならないことが書かれている。

また、羽仁が挙げた向軍治の主張は大きく2つにまとめることができる。一つは家庭において子どもに対して否定的な教え方や破壊的な言動を慎み、子どもに敬虔な態度をとることを教えること。もう一つは宗教的教育を行い、高尚信仰を身につけさせることである。松浦政泰は子ども部屋の設置によって、知らず知らずのうちに自然に必要な知識を児童に与えるという「自活自動」³⁴の方法を提唱する。具体的には部屋の中に時計、国旗、地図、軍人の写真などの装飾品を置くことによって、子どもに知識や愛国精神を自然に覚えさせることが挙げられる。

以上のように、羽仁が取り上げた3人の主張の共通点は家庭における具体的な教育内容と教育方法を提示することである。特にチャペル夫人と向は宗教的な精神教育を、松浦は子どもの愛国精神を育むべきだと主張する点で、いずれも精神的教育に重きが置かれていることが共通している。また「我家の家庭教育」で指摘された教育観、例えば発達段階に沿った教育や宗教教育の重要性といったものは、その後の羽仁の家庭教育思想でもしばしば言及されるものである。しかしこの段階ではそれらはまだ体系的なものとはなっていない。そのことは、これらの記事が他人の主張の取り纏めに留まるものであり、自分の言葉で家庭教育のあるべき姿を捉えるには至っていないことからもうかがえる。羽仁自身が家庭教育思想を展開するのは、『家庭女学講義』の創刊を待たなければならない。

3. 『家庭女学講義』の発行と羽仁もと子の家庭教育思想の展開

(1) 『家庭之友』とは異なる『家庭女学講義』の特徴

1906年3月号の『家庭之友』誌上で、特に主婦を読者に想定する『家庭女学講義』の創刊予告³⁵が発表された。そこでは創刊に至る二つの理由が挙げられている。一つは、羽仁が『家庭之友』の編集に携わって以来、多くの読者から主婦の修養の助けになるものを求める手紙が届いていたものの、当時はそのための適当な書籍や雑誌が存在していなかったとする。羽仁は当時の女学校の卒業生が「主婦たる素養の十分でないことと、社会的智識の乏しい」ことであると指摘し、さらに女学校での講義録が「实际的でなく、且つ甚だ親切を欠いて」、「鹿爪らしく、分り難く、従つて面白味のないばかりか、折角苦んで読んだ所で一向実地の役には立たない」³⁶と批判している。もう一つの理由は『家庭之友』の編集が安定してきており、子育てにも追々手がぬけるようになった羽仁は、新しい雑誌をつくる余裕ができたからであるという。

こうして翌月の4月に『家庭女学講義』を発行する旨が公式に宣言され、同誌は月1回の発行で、2年間で完結することとされた。同誌の特徴としては、羽仁は以下のように説明している³⁷。

従来の講義録などとは、全くその趣を変へまして、何所までも親切に、何所までも实际的に、家庭を中心として、婦人に必要なる智識を供給したい考でありますゆゑ、講師の如きも、女学校の先生でなく、学識と実験とを兼ね備へたる人々に御願

いたし、私（もと子）自身親しくそのお話を伺つて、分り難き所は繰返してお尋ね致し、平明にして興味ある談話体に認め、之をお読みになる方々は、恰かも一堂に集まつて、親しく名家の談話を聞かれると同じ感じをお持ちになることが出来るやうに致す積で御座います

このように『家庭女学講義』は实用性を重視すると同時に、面白さとわかりやすさを求めていることが分かる。また女学校に行ったことがない層（羽仁の表現では「学力の不足な方」）も読者として想定している旨が明記されており、それを受けて平易な言葉による説明に気を使っている点も特徴である。また、『家庭之友』と同じように、『家庭女学講義』の記事は、すべて羽仁によって執筆されていることも注目される³⁸。

講義の内容としては「育児」「家政」「衛生」「庖厨」「手芸」という家庭の実務に関する内容のほか、「講壇」「歴史」「地理」「科学」「社会」という婦人に一般教養を身につけさせるための項目が設けられている³⁹。後者の内容を見てみると、「講壇」では「婦人を中心として、種々の方面より、今の時勢に適応したる倫理の要旨を説き明かし、会員諸君の修得の葉」とする。「歴史」は「イギリス、アメリカ、ドイツ、フランス等の先進国の発達の有様」を記載する。「地理」は「日本を出発して、世界の国々を漫遊し、その主なる風俗並に以上の歴史に於て講ずることができません他の国々の進歩発達の大体をも、旅行者の見聞と共に」掲載する。「科学」では「日本の婦人に最も欠けて居るものは、科学的智識である」と記され、「興味ある科学上の話を通俗に説明」する。「社会」は「毎号その月の重なる社会上の出来事を面白く解説」するとしている。

このように『家庭女学講義』の編集方針は、育児・家政などといった家庭の実務を雑誌の眼目としつつも、並行して地理・歴史といった、それまでの女性教育では重視されていなかった教養知識の提供も視野に入れたものとなっている。さらにこのような教養知識を分かりやすく説明することが、読者層を拡大しようとする意欲が読み取れるであろう。そのうえで『家庭女学講義』は『家庭之友』との関係について、羽仁は以下のように考えている⁴⁰。

これまでは主婦のため、家のために、かういふ事も大切である、あゝいふ事も記さねばならぬと思ひながらも、一回または二回位で書き尽すことの出来ないものや、唯一部分を載せるだけでは、実際に役に立つまいと思ふことは、どうしても紙

数の少い、そして唯月一回の家庭之友には載せることが出来ませんでした所、日頃家庭之友に載せることが出来なくて、残惜しいと思つて居た事柄が、家庭女学講義の方に、大抵網羅することが出来るので御座います。（略）殊に実際家庭女学講義の編輯にかゝつて見ると、家庭之友の欠けたる所が、総てこの講義に依つて補はれるやうになると感じました

要するに『家庭女学講義』は『家庭之友』を補完するものという位置づけであり、二者の具体的な内容の違いについては、羽仁は以下のように述べている⁴¹。

家庭之友には、主として一つ〜切れ〜の問題、及びその時々のお思ひ付きを記し、家庭女学講義は、婦人に必要な思想並に智識を、順序正しく根本的に解釈し記述したものでありますゆえ、家庭之友の日常の家庭に重宝なるが如く、家庭女学講義は、主婦の修養のために適切な読物です。（略）家庭女学講義は、所謂女学校代用の講義録ではありません。主として文明日進の時勢に適應する主婦の修養を目的として、出来たものであります。私自身も家庭女学講義のために、多くの専門家のお話を伺つて、それを記載する間に、種々の智識を得ることが出来たのであります

このように『家庭女学講義』は主婦の修養を高めることを目的とし、女性に必要なだとされる思想、知識を体系的に記述するものとされる。この点で重要なのは、同誌が「女学校代用の講義録」とは違うものであるという点を、羽仁が強調していることである。『家庭女学講義』の読者は女学校を卒業してまだ結婚していない婦人、すでに結婚している主婦、職業に従事する婦人、「学力の不足を嘆きつつある」婦人を対象とされており⁴²、このことは羽仁が女学校に通うような社会層を超え、学校に通わないあるいは通えないような女性を讀者として念頭に置いていたことにほかならない。それは当時における新しい「教育」の受け手の掘り起しともいふべき作業と言ふことができよう。

（2）体系的な育児・家庭教育論

前述したように、羽仁は『家庭女学講義』で育児や家政などのような家庭の実務だけを論ずるのではなく、一般教養に関する内容も大量に盛り込んでいる。つまり、彼女は単なる家庭のことだけに精通する女性ではなく、いわゆる一般教養も持つ女性を作り出そうとし

ている。ではこのような新しい、一般知識も身につけたような女性に対して、家庭教育はどうあるべきものなのか。

『家庭女学講義』において、羽仁は育児を「養育」と「教育」の二面に分けて考えている⁴³。まず「養育」は主に「身体上の注意」を指しており、生まれた直後の幼児の取り扱いをはじめ、幼児の成長につれての相應の準備や注意などといったことが含まれている。養育に関する記事は毎号医学博士の加藤照磨の講義を掲載している。その内容は主に幼児が生まれた時から成長していく過程における食べ物や病気の予防と治療に関する知識である⁴⁴。

次に「教育」はいわゆる家庭教育であり、「精神上の注意」と解説され、幼児のしつけ方、年とつた子どもの監督法や、男女別々に必要とする注意などを指している。教育に関する記事は、羽仁自身が定めた「順序」に従つて豊富な経験をもつ母親や教育に熱心な人に取材して書かれている。その「順序」とは羽仁が考えた子どもの発達段階とも言え、各段階に応じて「如何にして子供により習慣を与ふべきか、如何にして細かに善悪を判別する所の能力を養はしむべきか、如何にして自己の所信を操守する確固たる精神を遣らしむべきか」⁴⁵というような順序の記事が掲載されていく⁴⁶。

このように、羽仁は育児を身体上の注意と精神上の教育に分けており、家庭教育は子どもの精神教育にあたるものとしてとらえている。これは第1節で詳述した『家庭之友』で現れた家庭教育に関する記事に比べると、形として体系化されたようになっていると言えよう。では羽仁は一体どのようなものを原動力として、家庭教育を考えていたのか。

（3）家庭教育の原動力となる精神性

『家庭女学講義』は、1908年1月に『婦人之友』に改題されるまでの1年9ヶ月間で、合計16号が発行された。羽仁の次女涼子は創刊号の発行の前日に肺炎のため亡くなった。次女涼子の死によって羽仁の思想の転換がもたらされ、キリスト教の信仰に目覚めることになったことはしばしば指摘されている⁴⁷。この変化は彼女の家庭教育思想にも影響を与えられた。彼女は1907年11月に「家庭教育の理想」⁴⁸を発表した。そこで家庭教育と「神」の関係性が以下のように示されている。

羽仁は「神の力」を強調するようになった。彼女によると、子どもの生まれつきの「天賦」（天分）を教育の力で引きのばすことができる。しかし、そののばす度合いは天分によって規定される。つまり、親は子ど

もの天分に適応する教育をしなければならない。また子どものでき具合によって、教育の価値を定めることができない。なぜならば「神の前に我教育の任を尽くす積りで、誠実に子供を教へ、その結果はすべてその子の天分と神の司り給ふ運命の鍵によって定まるのである」⁴⁹と考えているからである。

さらに、子どもの天分を明察し「一意その子の長ずる所をのばし、欠点を補ひて、その天分の伸び得る限りまでその智徳をのばし、何人にも生活問題はついて回るものと見て、その才能に相応したる職業的教育を施すこと、且つ成るべく苦勞なしに出世する道をと考へる代わりに、如何なる困難にも堪えて進む人間にしてやりたいといふとを心掛けたい」⁵⁰と示している。つまり、家庭教育はあくまでも神から授けた天分を引き伸ばすことにある。このように、「神の力」というものが教育の限界であるように見える。言い換えれば、家庭教育は「神」という精神性のもとに作られたのであろう。この精神性は、同年12月の『家庭女学講義』の最終号で発表された「家庭教育と信仰」⁵¹においても明確に現れている。

弱き人間のすることは、何事も理想通りにいきませぬけれど、(略) 独り子供のみならず、自分も共に同じ修養の道程にあるものと心得、天の愛護を信じて、人たるもの、高尚なる道を楽しみ勇みて進むやうにするならば、兎にも角にも大いなる過ちなしに子供の徳性を導くことが出来るであらうかと思ひます。自らも神を信ぜず、天のことを度外に着いて、唯周囲の人の毀誉褒貶と、この世の成敗のみを心に掛けて、その子を育てる母親は、如何に多くの智慧を持ち、いかに多くの力を持つていると思つても、その智恵とその力は実に浅墓なものであります。かゝる教育法の危きことは、実に風前の灯火の如きものであります

このように、羽仁は子どもを教育するには、「神」や「天」という存在を絶対的な前提として、「高尚なる道」を歩まなければならないと示している。このような「高尚」への追求、いわゆる精神性的な修養は、羽仁の家庭教育思想の原動力となっていると考えられよう。この点についてのさらなる考察は稿を改めて行いたい。

おわりに

本稿では、『家庭之友』と『家庭女学講義』の編集意図と内容的特色を考察することで、羽仁の家庭教育

思想がいかに誕生、展開してきたかを考察した。そこで、以下のようなことが明らかになった。

羽仁は『家庭之友』において、家庭や家庭における女性のあり方をめぐって模索し、新しい家庭像を作り出そうとした。そこでは育児や家政などの家庭の実務に関する問題を中心に、婦人の修養についても論じていた。そのなかに、専門家・羽仁・読者の三者の間のコミュニケーションの相互作用が見られた。このような相互作用があったからこそ、羽仁の独自の家庭教育思想が生み出されたことを明らかにした。さらに『家庭之友』を補完する『家庭女学講義』は、当時の女学校の教育への批判から作られ、婦人の一般教養に関する内容が大量に盛り込まれた。こうしたことから、羽仁は社会層を超える婦人を対象とし、家庭のことに止まらず、一般教養をも持つ新しい女性層、いわゆる中流階層を作り出そうとしていたことが分かった。さらにこれらの雑誌を通して、このような中流階層の女性読者に向けての言説の空間を作り出し、そこで羽仁が自分の家庭教育思想を展開させていった。こうしたなかで、彼女の家庭教育思想を含めた家庭論・教育論が体系化されるようになった。言い換えれば、このような読者層ができてはじめて、彼女の家庭教育思想が体系化されたと言える。つまり、小林が述べたような大正期に「権利主体としての『子供本位』」という体系的な家庭教育論の持ち主である羽仁は、実は明治末期にすでに2つの雑誌を通して、家庭教育思想を体系化させようとしていたことが明らかになった。そしてこうした思想の原動力となるのは、「神」や「天」と示すような精神性のものがあることが提示できる。しかし本稿では、このような精神性を具体化することができなかった。この精神性は羽仁の家庭教育体系の中において、どこまで影響力を持ち、どのように作用していたのかといったことを考察しなければならない。特にこの精神性は林が述べたように国家とは無関係なのかは改めて検証する必要があるであろう。それを検証するためには、例えば羽仁の日露戦争をめぐる言説のなかで、国家的価値観とこの精神性はどのような関係にあるか、さらにその関係のなかにおいて家庭がどのように位置付けられているのかといった点の考察が必要であろう。こうした観点からの分析については、今後の課題にしたい。

〔注〕

¹ 創刊号と第2号の雑誌名は、『家庭之友』である。第3号以降、『家庭之友』に変わるが、その理由は見当たらない。本稿では、第1、2号も『家庭之友』と

- 統一して表記する。なお資料引用にあたっては、旧字体の漢字は新字体に改めた。
- ² 小山静子『子どもたちの近代—学校教育と家庭教育—』吉川弘文館、2002年、pp.104-109。沢山美生子「近代的母親像の形成についての一考察—1890-1900年代における育児論の展開—」『歴史評論』第443号、1987年、pp.63-81。
- ³ 家庭教育と学校教育の関係について、家庭教育は完璧に学校教育体制の中に組み込まれたという指摘もなされている（小山、前掲書、pp.141-145を参照）。
- ⁴ それまでの羽仁の人生について、羽仁もと子著作集第14巻『半生を語る』（婦人之友社、1928年）や斎藤道子『羽仁もと子—生涯と思想—』（ドメス出版、1988年）が詳しい。
- ⁵ 『家庭之友』の発行は1910年まで続けられていたが、1908年末に羽仁は雑誌の編集をやめたため、本稿で取り上げるのは1903年の創刊から1908年に羽仁が編集を辞めるまで発行されたものである。
- ⁶ 例えば、以下のような研究が挙げられる。平塚益徳「羽仁もと子と自由学園」『人物を中心とした女子教育史』帝国地方行政学会、1965年、pp.253-266。中野光『大正自由教育の研究』黎明書房、1968年、pp.203-207。秋永芳郎『羽仁もと子—評伝—』新人物往来社、1969年。小島勝「大正自由教育の分析視角—その実践の限界—」『京都大学教育学部紀要』第21巻、1975年、pp.154-160。中嶋みさき「自由学園、「自労自治」の教育とジェンダー—羽仁もと子の「生活」概念をてがかりに—」橋本紀子・逸見勝亮編『ジェンダーと教育の歴史』川島書店2003年、pp.101-127。岩間浩「羽仁もと子・自由学園と新教育運動」『教育新世界』第37巻1号、2012年、pp.33-48。
- ⁷ 「自由学園の創立」『婦人之友』第15巻2号、pp.2-12。
- ⁸ 斎藤道子、前掲書、p.130。
- ⁹ 同上、p.153。
- ¹⁰ 例えば、西村絢子「羽仁もと子の教育論—女子教育観と生活主義教育の系譜について—」『教育学研究』第40巻3号、1973年、pp.54-62。立川正世「羽仁もと子の教育思想—自由学園にたくしたもの—」『教育論叢』第30号、1987年、pp.101-110。立川正世「羽仁もと子の教育思想」『名古屋大学教育学部紀要（教育学科）』第35巻、1988年、pp.61-73。福原充「新教育学校の創立基盤—自由学園を事例として—」『日本教育史学会紀要』第4号、2014年、pp.20-47。
- ¹¹ 斎藤は、『家庭之友』の時期の羽仁の家庭論を平民主義家庭論、のちの『婦人之友』期の家庭論を民主主義家庭論と名付けて論じてきた。前者は、平民主義の思想をもとに、「合理的な中等生活」を主張している。後者は前者に「人格の自由と独立」をくわえて「家族各自が自由にその思いを語るにより、遺憾なき了解と接触が得られ、そこに各自の進歩と独自の人格形成があり、生ける家庭がある」と示している（斎藤、前掲書、pp.55-76及びp.100）。
- ¹² 小関孝子『生活合理化と家庭の近代—全国友の会による『カイゼン』と『婦人之友』—』勁草書房、2015年。
- ¹³ 小林輝行『近代日本の家庭と教育』杉山書店、1982年。小林輝行「大正期家庭教育論における子どもの権利—羽仁もと子と安部磯雄の家庭教育論を中心に—」『信州大学教育学部紀要』第46巻、1982年、pp.15-26。
- ¹⁴ 小林によると、権利主体としての「子供本位」は、子どもの人格的存在と人格的価値の承認の上になつて、一人の人間として子どもがもっている固有の権利について説いたものである。国家主義的「子供本位」の特徴は、子どもの個性、人格尊重の主張を展開しながら、全体的には、国家主義という枠組みの中で、それらの方法的次元のものに矮小化ないしは歪曲化してしまっていることであると指摘される（小林、前掲書、pp.217-219）。
- ¹⁵ しかし小林の考察は、昭和期に婦人之友社によって発行された『羽仁もと子著作集』、『羽仁もと子選集』に依拠したものである。現在では、この『羽仁もと子著作集』全21巻は、編集に際して羽仁自身によって当時の文章の内容を意図的に削除したり、変えたりした形跡があることが分かっている（例えば、李垠庚「羽仁もと子の思想・生活・戦争—近代日本女性キリスト者とその時代—」東京大学博士論文（学術）、2009年、p.15を参照）。そのため、小林の評価が妥当であったかどうかについては、資料の信ぴょう性の再検討とともに、再考が必要であろう。
- ¹⁶ 林美帆「羽仁もと子の家庭教育論」『奈良女子大学大学院人間文化研究科年報』2003年、pp.33-44。「羽仁もと子—もう一つの近代家族論—」奈良女子大学大学院人間文化研究科博士論文、2010年。
- ¹⁷ 馬場結子「羽仁もと子の家庭教育に関する一考察—母親の生き方と子どもの生活を中心に—」『淑徳大学短期大学部研究紀要』第54号、2015年。鈴木博雄「羽仁もと子の家庭教育思想の現代的意義—福沢論吉との対比において—」『日本教材文化研究財団研究紀要』第29号、1999年、pp.68-71。前者は現代の子

育て支援という視点から、女性のライフスタイルを母親の生き方と子育てのあり方に焦点をあてて、羽仁の家庭教育論を考察した。後者は羽仁の家庭教育思想を福沢諭吉と比較しながら、その現代的意義を見出そうとした。

¹⁸『家庭之友』の創刊の経緯について、羽仁吉一は「先日、山縣悌三郎に会ったところ、家庭雑誌を出したいと思っているが、編輯の方を引き受けては呉れまいかと云ふ話があり、余もかねて其の志をもっていたので早速これを承諾することとした」と書いている（「余談」『家庭之友』第1巻1号、p.36）。また、『家庭之友』の発行元であった内外出版協会を経営した山縣悌三郎の自伝『児孫のために余の生涯を語る』では、より詳しい経緯が書かれている。山縣によると、「初め羽仁吉一、五十雄の紹介状を携へて来訪せられ、其の妻の為に適當なる賃仕事を与へんことを懇請せられた。乃ち試みに彼女が報知新聞の為に執筆せられたる家庭問題に関する雑文を集めたるものを一閱せるに、其の筆致の平易流暢にして思想穩健着実、頗る家庭の記事論説に適することを認めれば、協議の上、新たに家庭雑誌を発行して、編集を担当せしめ、毎月一定の報酬（金參拾円）を贈ることに決した」と記述されている。

¹⁹羽仁もと子と吉一の仕事分担ははっきりと記載されていないが、毎号の編集後記にあたる記事を確認したところ、創刊号と第2号あたりは、もと子が長女説子の出産の時期にあつたため、記事の執筆だけをし、夫の吉一が編集を行ったことが分かる。第3号からの編集後記の執筆の署名は「もと子」となり、彼女が編集を行ったことが推測される。また、それは、1907年7月に吉一が発表した「読者諸君に告ぐ」（『家庭之友』第5巻4号）から裏付けることができる。彼によると、「御承知の如く、小生は本誌創刊間もなく新聞に関係したるため、従て本誌の編輯は殆ど荆妻一人の手に成り、小生は僅かに其大体に就て助言を与ふるに過ぎず、遺憾のことに思い暮らして居りました（略）」が示したように、主として『家庭之友』を務めたのはもと子であった。

²⁰「巻頭」『家庭之友』第1巻1号、p.1。

²¹同上。

²²「紹介 明治母の会」『家庭之友』第1巻2号、pp.66-67。明治母の会は、東京のキリスト教婦人がはじめた婦人会で、月一回集まって、英会話、子ども服仕立て、料理、家事などを学ぶ。会頭は井の口たづ、副会頭はコート夫人と羽仁である。

²³ほかに「家庭顧問」という欄もあったが、長く続け

なかった。

²⁴「余談」『家庭之友』第1巻2号、p.67。

²⁵羽仁説子『私の受けた家庭教育—羽仁もと子の思出一—』婦人之友社、1963年。

²⁶「小児を幼稚園に託するの可否」『家庭之友』第1巻2号、pp.37-41。

²⁷幼稚園論争については、太田素子・浅井幸子編『保育と家庭教育の誕生—1890-1930—』藤原書店、2012年、pp.29-84が詳しい。

²⁸「家庭幼稚園の話」『家庭之友』第1巻4号、pp.110-113。

²⁹羽仁は普通幼稚園について、「見習ひとも四人の保母が居りましたが、その中三人、殊に主任だという婦人のツンへして居るのには、一方ならず驚きました。（略）其間に優しい情といふものが少しも通ふて居らぬ」と描いている。それに対して、羽仁は「実に不愉快を感じずにはいられ」なかったという（同上）。

³⁰同上。

³¹同上。

³²同盟母の会は、1903年から、東京市内及び地方にある多くの母の会が集まって、毎年4月に開催された集会のことである。1905年4月の同盟母の会の大会で、羽仁は、本会の書記に当選した（「同盟母の会」『家庭之友』第3巻2号、pp.58-60）。

³³「我家の家庭教育」『家庭之友』第3巻1号、pp.7-8。

³⁴松浦によると、「自活自動」とは、「自然に任せて干渉せないとはいふだけで、その外何にも、事々しく述ぶる程のことはない」という（「我家の家庭教育」『家庭之友』第3巻3号、pp.61-70）。

³⁵「主婦の為に（家庭女学講義の発行）」『家庭之友』第3巻12号、pp.362-364。

³⁶同上。

³⁷「家庭女学講義（次の趣意書をお読み下さい）」『家庭之友』第4巻3号、ページ数記載なし。

³⁸羽仁は「家庭之友のみならず、この家庭女学講義も最初の一頁から最終の頁まで、一行も人手を借らず、すべて私自身に、講師のお話を伺つて、不審の箇所は質問し、さてその智識をどういふ風に記したならば、最も平易に且つ興味多く、而して或者は直ちに実用に適するやうになるであらうかといふことを考へて、悉く一人で認めるものであります」と記述している（「編輯記事」『家庭女学講義』第（1年）3号、pp.9-10）。

³⁹「編輯の方針」『家庭女学講義』第（1年）1号、pp.2

-4. 以下の内容の紹介も同記事から適宜に引用するものである。

⁴⁰ 「家庭女学講義に就て」『家庭之友』第4巻1号, pp.24-26。

⁴¹ 「家庭女学講義の事」『家庭之友』第4巻2号, pp.60-61。

⁴² 「家庭女学講義(次の趣意書をお読み下さい)」, 前掲誌。

⁴³ 「編輯の方針」, 前掲誌。

⁴⁴ 育児に関する記事は, 「初生児の養育」(第1号), 「出産の準備」(加藤常子, 第1号), 「授乳の注意」(第2号), 「出産時の心得」(加藤常子, 第2号), 「牛乳の飲ませ方」(第3号), 「種痘の注意」(第4号), 「乳歯に就て」(第5号), 「幼児の食物」(第6号), 「幼児喉頭の病気」(第7号), 「麻疹に就て」(第8号), 「百日咳」(第9号), 「気管枝加答児」(第10号), 「脳膜炎」(第11号), 「幼児腸胃の病気」(第12号), 「胎毒に就て」(第2年第1号), 「幼児の食物としての果物」(第2年第2号), 「小児の過栄養」「脱腸の手当」(第2年第3号及第4号)がある。

⁴⁵ 「家庭教育の基礎」『家庭女学講義』第(1年)1号, p.10。

⁴⁶ 記事のタイトルを見てみると, 「幼児に与ふべき習

慣」(ミセスボールス, 第2号), 「幼児に与ふべき習慣」(もと子, 第3号), 「幼児に与ふべき習慣」(ミセスボールス, 第6号), 「幼児に与ふべき習慣」(ミセスボールス, 第7号), 「子供と同情」(もと子, 第8号), 「幼児に与ふべき習慣」(もと子, 第11号), 「神教的なる教へ方(幼児に与ふべき習慣)」(もと子, 第12号), 「理性を養はしむる教え方」(もと子, 第2年第1号), 「意志を強くせしむる教へ方」(もと子, 第2年第2号), 「家庭教育と信仰」(もと子, 第2年第3号及第4号)がある。

⁴⁷ 林美帆「羽仁もと子の思想形成と理想社会—自由・協力・愛—」『歴史学研究』第804号, 2005年, pp.20-36。李垠庚「羽仁もと子の思想と活動の基礎—経験・信仰・経済を中心として—」日本思想史・思想論研究会編『思想史研究』第6号, 2006年, pp.129-136など。

⁴⁸ 「家庭教育の理想」『家庭之友』第5巻9号, pp.257-260。

⁴⁹ 同上。

⁵⁰ 同上。

⁵¹ 「家庭教育と信仰」『家庭女学講義』第2年第3号及4号, pp.19-22。

A Study of the Creation and Development of Motoko Hani's
Thoughts on Home Education:
Focus on the authorial editing intention of
Katei no Tomo and *Katei Jyogaku Kougi*

XU ZHENZHEN*

By analyzing the edited intentions and distinguishing features of two magazines - *Katei no Tomo* (Friend of Home, 1903.4–1908.12) and *Katei Jyogaku Kougi* (Lecture for Women and Home, 1906.4–1907.12), this study examines how Motoko Hani's thoughts on home education were created and developed during the late Meiji period.

Teruyuki Kobayashi, who conducted historical research on the home education of Modern Japan, pointed out that Hani's home education theory was one of the most systematized in the Taisho period (Kobayashi, 1982). Like Kobayashi, many previous studies regarding Hani's pedagogy and methodology concentrated on the Taisho and Showa periods. Yet Hani edited *Katei no Tomo* from 1903, establishing her own magazine, *Katei Jyogaku Kougi*, in 1907, during the Meiji period, from which she developed her own ideas about her theory. This study analyzes the contents of these magazines in order to elucidate how Hani's home education ideas were systematized, and what the driving force behind it was.

This research demonstrates that there were interactions between Hani and certain experts. Their theories and practices, notable in *Katei no Tomo*, influenced her thoughts on home education. Middle-class women who had gained general knowledge from reading *Katei Jyogaku Kougi*, became an important source of new readership and a catalyst for Hani's reflections on the growing expertise of the subject. This research shows how Hani's home education ideas could not be systematized until women's readership was consolidated. Having secured this at this time, the systemization of Hani's ideas on home education can be said to have begun during the later Meiji period. This study also reveals that the driving force behind Hani's home education theory was spirituality, and suggests that the specific characteristics of this spirituality require further research.

* Student, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

